

中京大学附属図書館豊田分館

新館ができるまで

福 井 司 郎

1. 新館建設に至るまで

中京大学附属図書館豊田分館は、昭和46年体育学部が名古屋キャンパスから移転すると同時に、この地に移った。始めは分室として、4号館2階で、蔵書約1万冊、閲覧座席40、事務長のほか館員1名（非常勤1名）という規模でスタートした。蔵書構成は体育、教育、医学、保健衛生などに一般教養を加えた体育単科大学のそれであった。

昭和48年本館事務棟が完成し、その西側1・2階に分室から分館と名を改めて移転した。これは閲覧座席164、約10万冊を収蔵できる3層からなる書庫をそなえたもので、当初蔵書は約3万冊、事務長のほか館員4名（非常勤2名）で運営されていた。

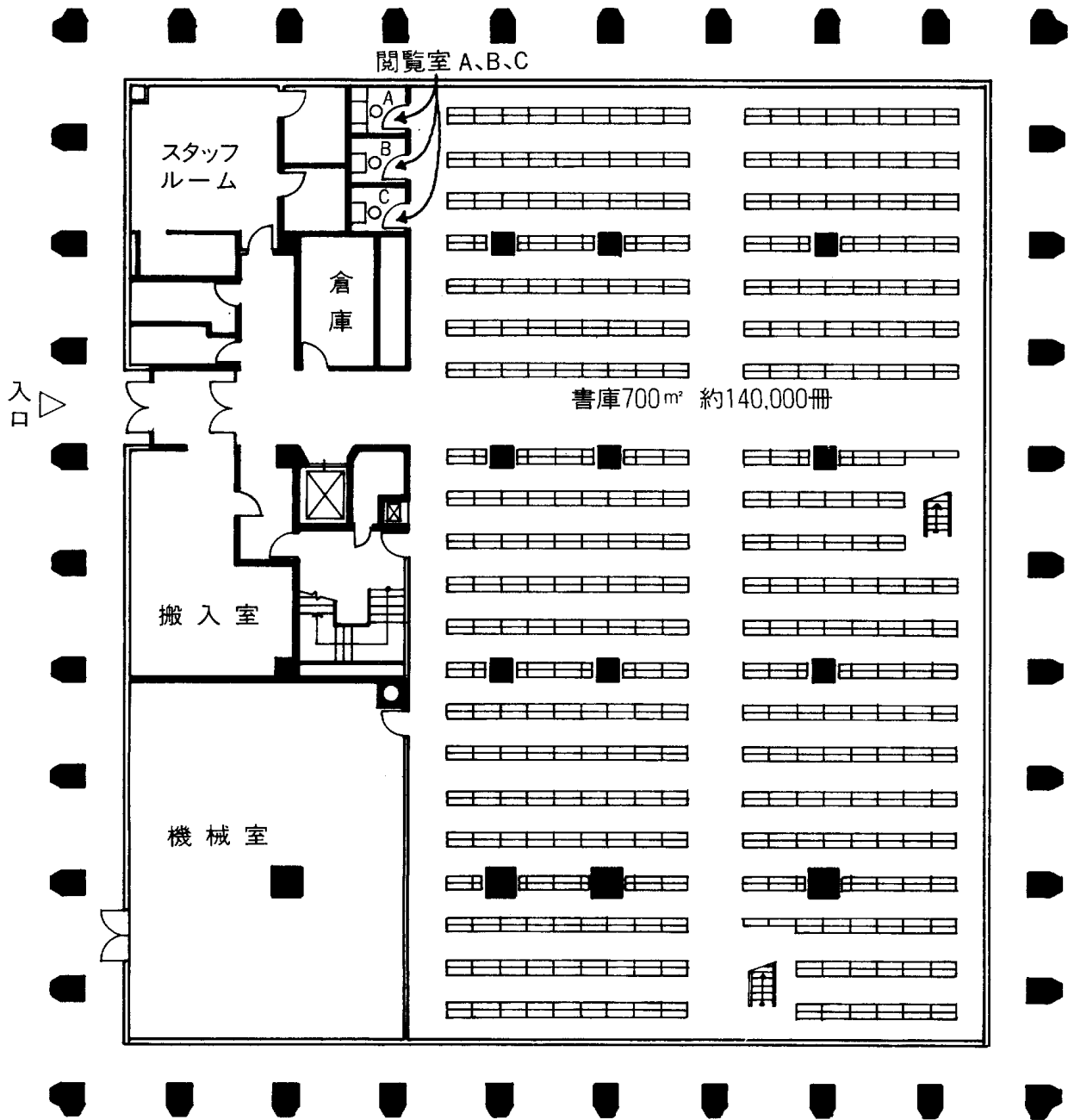
昭和49年大学院体育研究科増設による資料の充実、10年間に亙る資料の蓄積によって、ほぼ収蔵量の限界に達した状態で、昭和61年の社会学部設置の為の資料急増を迎え、増築計画が浮上してきた。

2. 増改築計画から新築計画へ

当初の建築将来計画でも、現在地に独立棟として、図書館を建てることにはなっていたようであるが、61年度社会学部発足の時点では、本館1・2階全部を改築し、書庫を北側のり面に増築することで、計画立案された。

そのあらまは、①40万冊収蔵の書庫を増築して、既存の書庫と併せて50万冊の収蔵量とする。②開架図書室、レファレンス室を拡大して5万冊以上の規模にする。③閲覧座席数を400席以上にする。④AV室を設ける(20席以上の視聴ブースを備える)。⑤ブラウジングルームを拡大する。⑥カ

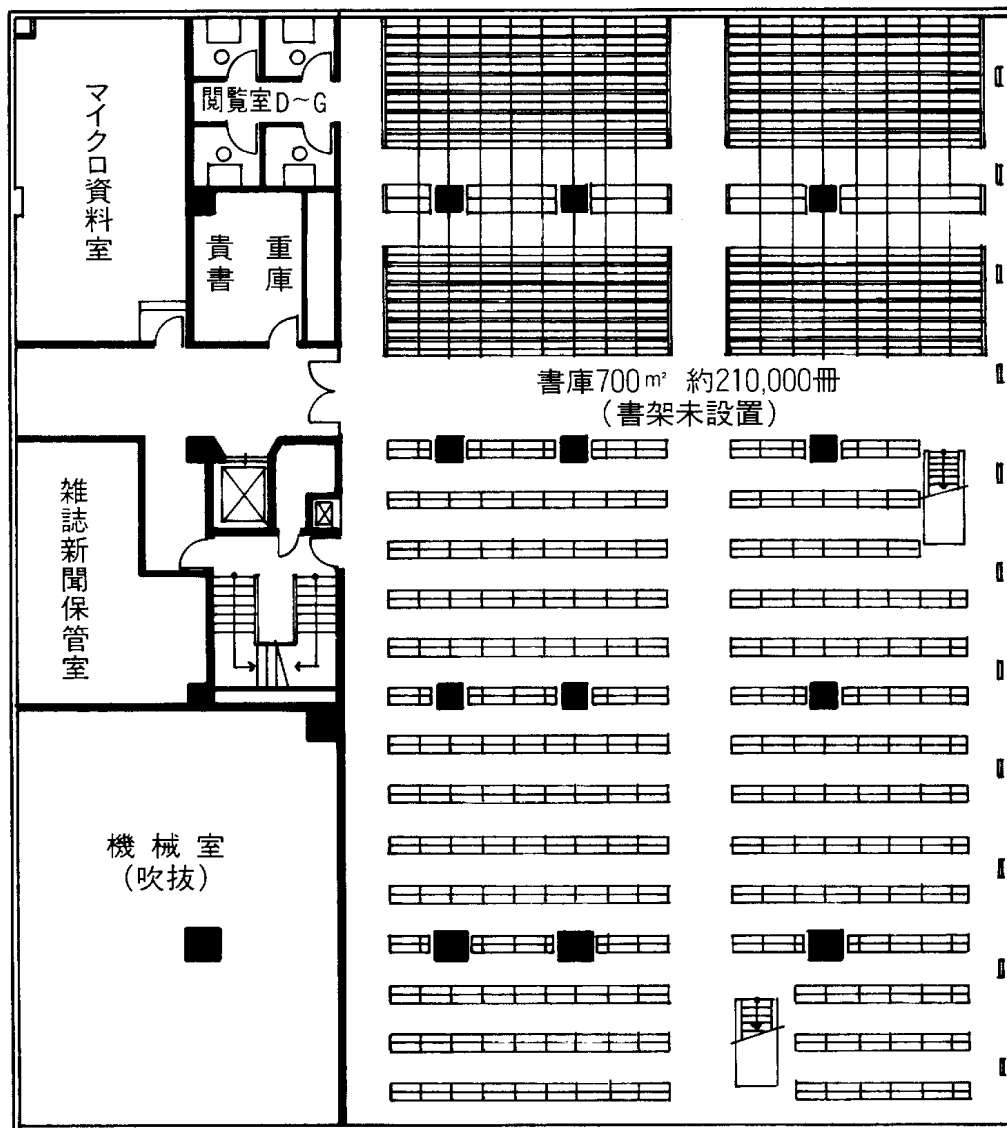
1F-1 (930m²)



フェテリアなどを併設して、閉館後も学生が集まるような雰囲気をつくる、
というようなものであった。

当時、これと併行して、事務局及び体育学部棟の新築も計画されていた
が、総合的に考えると、図書館の増改築には多大な費用がかかるうえ、余
り便利なものにならないということもあり、図書館の移転した後を改築し
て事務局を置く方が良いのではないかと、という案が有力になった。そして

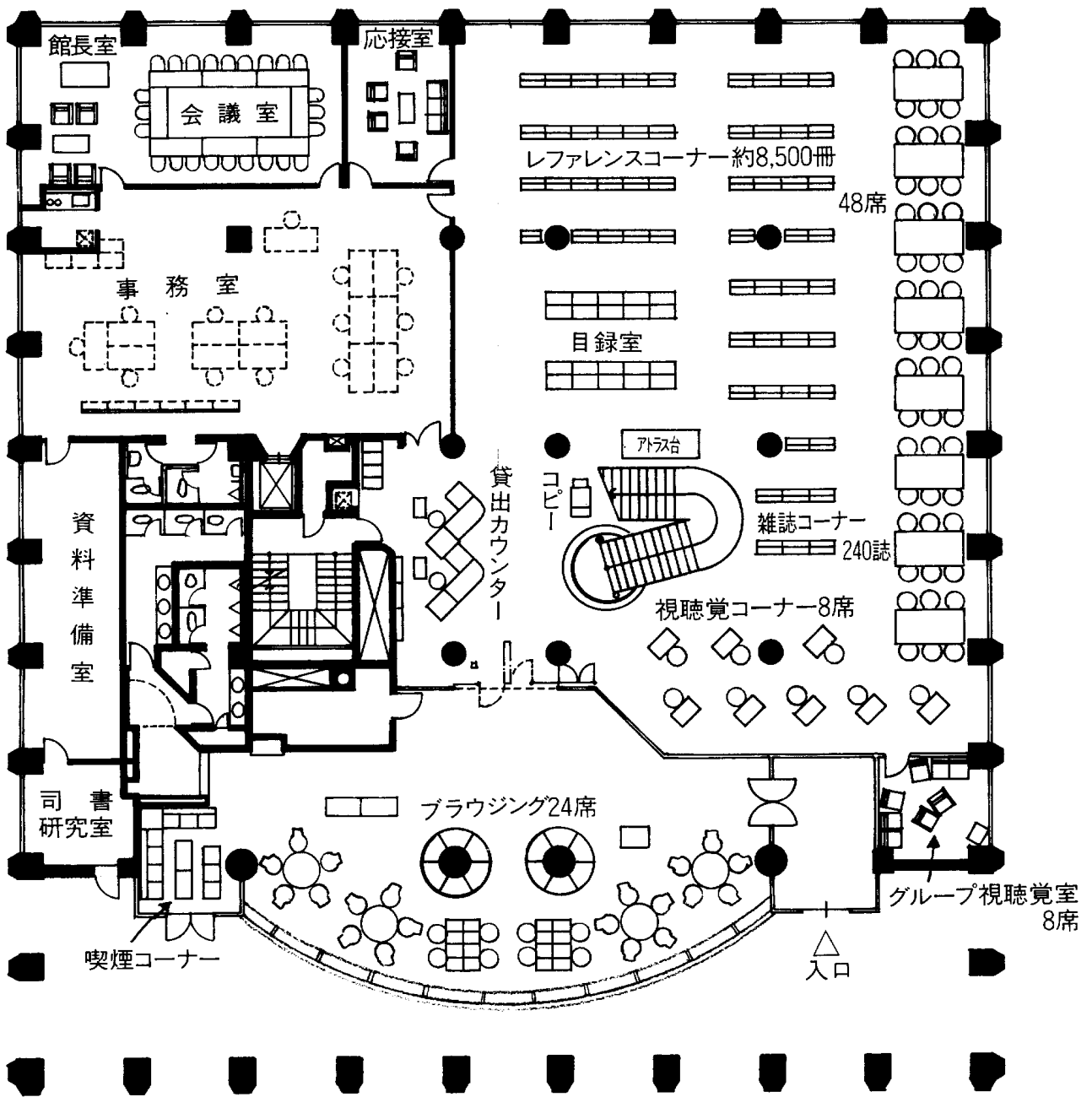
1F-2(930m²)



梅村学長の英断によって、将来計画にあったように、現在位置に、独立棟として新築することになった。

梅村学園理事会、中京大学総合建設委員会、図書委員会、豊田キャンパス懇談会、図書館会議、豊田事務局管理職会、分館内会議など様々な会議を往復しながら、少しずつ計画が具体的になって行くのだが、昭和62年度着工、現在位置に新築することが決定するについては、建築順序最優先の

2F (990m²)

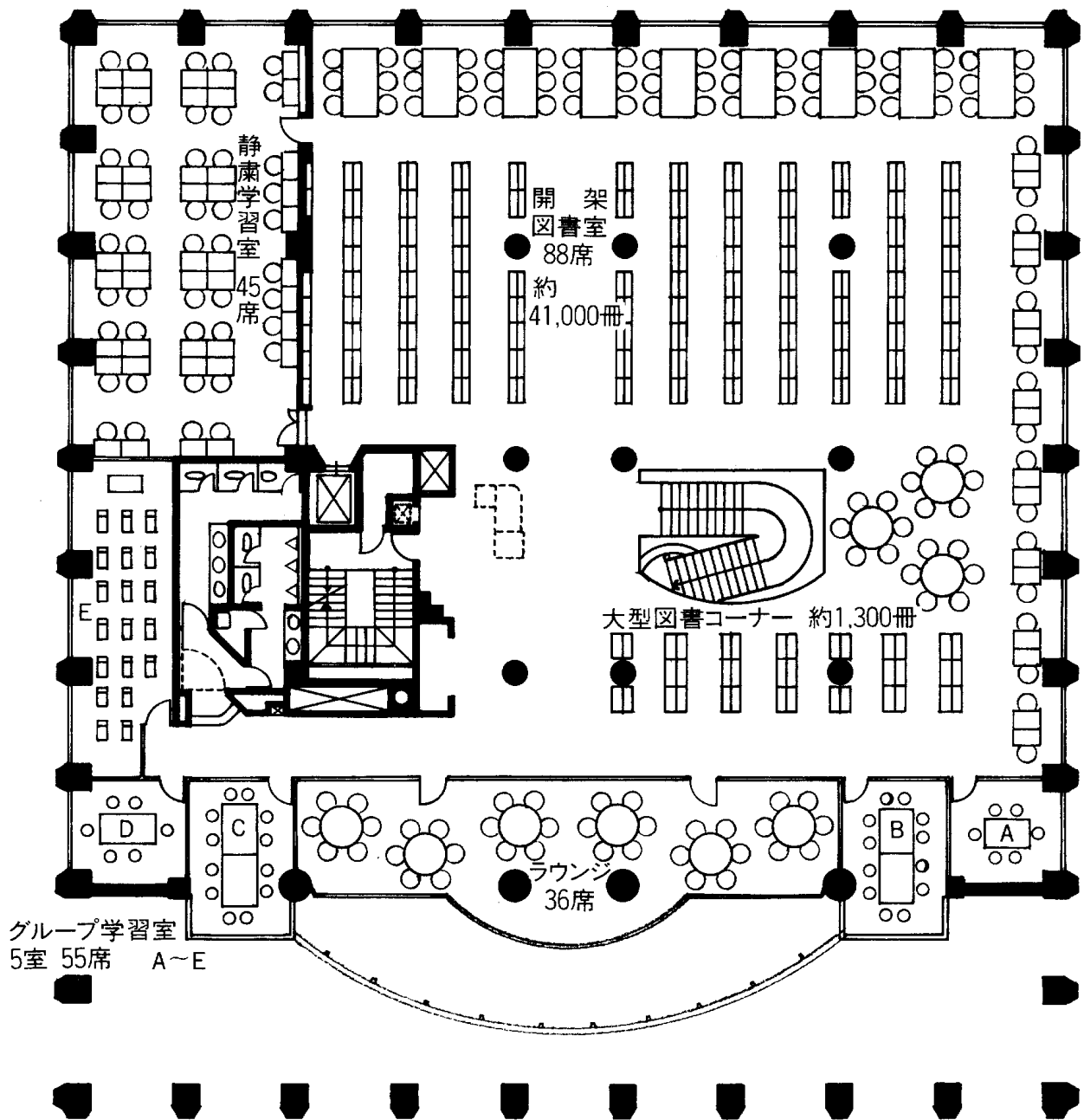


体育学部研究棟を後にして戴いた体育学部教授会の寛大な計らい、新築から改築に譲歩して戴いた事務局側の合理的判断、社会学部をはじめとする各学部、教養部の図書館建設に対する並々ならぬ熱意があったからである。

3. 基本設計要領

昭和61年10月7日、新築基本設計要領ができた。そのあらまはしは次のと

3F(950m²)



うりである。

①建築場所；豊田学舎8号館の東、テニスコート（3面）の部分

②建物概要； a. 閉架書庫部分＝30万冊（集密書架を含む）、非図書資料室（マイクロ資料など）、貴重図書庫
開架閲覧室部分＝5万冊、

b. 一般管理部分＝館長室（会議室を含む）、事務室（人

員14名)、応接室、作業室(製本、視聴覚資料作製など)、スタッフルーム、受入れ荷解き室、司書講座講師研究室、

- c. サービス部分=一般図書閲覧室75席、参考図書閲覧室30席、グループ学習室3室22席、静粛学習室50席、視聴室20席、目録室(カードケース20台)、ブラウジングルーム25席(新聞閲覧室、一般雑誌閲覧室、カフェテリアをふくむ)、コピー室、
- d. その他=ブックディテクション、入館者数チェック、

- ③留意事項；
- a. 玄関、荷物搬入口にいたるアプローチは段差を避けスロープにする。
 - b. 各階のフローアも段差を付けず平面にする。
 - c. 管理上なるべく低層建築とする。その際周囲の建物との関係に配慮する。
 - e. 将来書庫(50万冊収蔵)を増築できるようにする。ニューメディアのサービス部門はこの増築部分において本格的なものを考え、今回の建築においては必要最小限にとどめる。
 - f. 自然光をできるだけ採り入れるように配慮する。
 - g. 上下水、電気、ガス、階段、エレベーターなど各階同じ位置に集中して、その他の部分をなるべく区切らないで広くつかえるようにする。(コア型配置)

床延面積3,300㎡(1000坪)、総工費7億6千万円、

以上の条件で設計図の作製を複数の建設会社に依頼し、検討した結果三井建設株式会社に、施工を依頼することになった。

4. 着工から竣工へ

完成後の図書館の各階面積、席数、収蔵冊数などは100p～103pの図に

示した通りであるが、ここに至るまで、設計図は11回描きかえられた。短期間ではあったが、幾度も会議を重ねて、その都度変更された。理事会、総合建設委員会によって承認されている、総工費、及び敷地面積の枠内で、図書館側からは管理運営上の問題、利用者（学生、教員）の便益からの問題、建設側からは技術上の問題、安全上の問題、美観の問題など、一致点を見いだすのに困難な問題ばかりであった。

閉館後も学習の場を確保して欲しい、21世紀を先取りした斬新さがない、ニューメディアへの配慮がかけている、座席の配列に余裕をもたせてほしい、など数々の問題であるが、100%とはいかないまでも、できるかぎりとりいれるようにした。また、入口へのアプローチには階段ができてしまったが、隣接する建物ができた時点で、回廊のように連結して、階段を使わずにスロープで入れるようにするなど、後日に改善することになっているものもあり、基本的な要望は何らかのかたちで取込むことができた。

昭和62年4月14日、同時着工の球技体育館とともに地鎮祭を行い、建築が始まった。

建築は順調に進み、昭和63年4月開館を待つことになった。